

# タオエンは魔女

著者／流遠亜沙

---

ASSAULT-SYSTEM 文庫

「ハッピー・ハロウィン。トリック・オア・トリート」

一応、イベントなので言っておきます。これでノルマ達成です。

私の名前はタオエン。

ソイエス  
Z S 学園高等部に通う普通の高校一年生。

知人の手伝いで時々、『看板娘』をやっている、今まさに看板娘中です。

そんな言葉は知らない？ ならば覚えて帰ってください。

今日は十月三十一日でハロウィンです。本来は海外のイベントで、秋の収穫を祝い、悪霊を追い払う宗教的な意味合いを持つ行事ですが、近年では仮装をして街を練り歩く印象が強いですね。

この国は文化体系が雑多で、何かと理由を付けては騒ぎたがるきらいがあります。逆に言えば、口実がなければ行動出来ない国民性を表しているとも取れますね。

大義名分がなければ何も出来ない。

まったくもって面倒なお国柄です。

「——タオ姉、お待たせ〜」

そんな事を考えていると、ふいに私を呼ぶ愛らしい声が聞こえてくる。そちらを向けば、声と同様に可愛らしい、小柄な少女がいた。茶色のショートヘアと、猫のような黄色い瞳。朗らかな笑顔はデフォルトで、けしからん可愛らしさだ。

ベアトリーチエ。

私の妹で、ソイエス  
Z S 学園中等部の中学一年生。

「ベアトリーチエ、夜道で走るでない。転ぶぞ?」

そう言っつてベアトリーチエを気遣っているのは、長い黒髪をポニーテールにした凛とした少女。吊り目気味のだいたい橙色の瞳と、少し古風な言葉遣いから、武士や侍といった印象を受ける。大和撫子といった、おしとやかなイメージではない。それでいてプロポーシオンは抜群で、そういう作品だったら『りよしゆう 虜囚の辱めを受けるくのいち』役が似合いそうだ。

ヤミヒメ。

私の姉で、ソイエス  
Z S 学園高等部の高校二年生。

「……タオエン、私で妙な妄想をするのはやめるがよい」

「すみません。姉さんが何を言っているのか見当が付きません」

姉さんが嫌そうな顔をして言ったが、私はとぼける事にした。

「とぼけるな。お前がどれだけポーカーフェイスだろうと、視線で判るのだ。悪寒がするからな」

なるほど、伊達に私の姉ではない。私の事をよく判っている。

「さすがですね。ちなみに、私の脳内で姉さんは凌辱と恥辱の限りを尽くされ、抵抗むなしく、少しずつ快樂に——」

「もうよい！ それ以上は聞きたくない……」

顔を赤くして怒る姉さんは可愛い。こういう話題に免疫がないというか、慣れる様子がまったくない。だから、無性にいじめたくなる。

「ヤミ姉は恥ずかしがり屋だねえ」

対して、末っ子のベアトリーチェは動じない。基本的には無邪気だが、どこか小悪魔めいた気質がある。幼い外見とは裏腹に、立ち回りも上手い。姉さんはそういう点でも不器用なので、やはり対照的だ。

綺麗な姉と愛らしい妹。可愛い姉妹に挟まれ、姉と妹の両方を楽しめる私は幸せ者だ。

それはそれとして——

「姉さんもベアトリーチェも、なぜ普段着なんです？」

今日はハロウィンで、私と同じく看板娘として呼ばれたはず。なのに、二人とも仮装をしていない。

「仮装してるよ？ ほら、猫娘——にゃんにゃん♪」

「私は狼男だ……わ、わおーん」

ベアトリーチェは楽しげに、姉さんは少し恥ずかしそうに、そう答えた。確かに二人とも猫と狼の耳を付けてはいるが……。

「最初からついているものは仮装とは言いません。やり直しを要求します」

私は半眼を作って言った。せっかくハロウィンで二人のコスプレが見られると思ひ、わざわざ来たのに、これでは徒労だ。だいたい、ベアトリーチェの耳は正確には豹だ。

「うんとね、三人分用意する余裕がなかったってマイスターが言ってたよ」

「じむ。『BALSTFER form』の仕込みで手一杯だと言っていたな」

ベアトリーチェと姉さんの言葉に、私の頭が真っ白になる。絶望を突き付けられた気分だ。

「……帰りましようか。これ以上いても無意味です」

元々、看板娘をしても何の報酬もない。姉さん達と一緒にだから仕方なくやってるだけなので、無理に付き合う義理はない。マイスター——私達の雇い主は死ねばいい。そもそも、報酬がないので雇われているという表現もおかしいのだ。

「——ん？ なんだ、もう帰るのか？」

ふいに私達とは違う声が出た。気怠げな低音は男——いや、少年のものだ。うんざりし

た気分で声のした方を向くと、私や姉さんと同年代の少年がいた。長めの黒髪と、死んだ魚のような黒い瞳。声と同じ気怠い雰囲気をもった、やる気のなさそうな表情。

アサト。

姉さんの同級生で、私達姉妹が居候をさせてもらっている家の一応の家主。

厄介な事に姉さんは彼に想いを寄せており、ベアトリーチェも『お兄ちゃん』と呼んで慕っている。まったくもって業腹だ。呪殺したい。

「……アサトさんも来てたんですね。わざわざ姉さん達を送ってくれてありがとうございます。帰りは私がいるのでどうぞお帰りください。夜道で刺されればいいのに」

「今、さりげなく物騒な事を言われたぞ」

さりげなく言ったつもりが気付かれた。本来なら『さん』など付けたくはないが、年上で家主でもあるので、敬称は付けざるを得ない。不本意だが。

「しかし、魔女か……なるほどな」

アサトさんが私の格好を見て言った。舐め回すようないやらしい視線だ。訴えれば勝訴確定だろう。

「なるほどとは、どういう意味ですか？」

「すごく『らしい』と思ったただだが？」

「説明を求めます」

「だから、似合うって言ってるんだ」

どういう意味だろう。言葉通り、魔女の衣装が似合っていると云っているのだろうか。

それとも、私の性格が魔女っぽいと揶揄されているのだろうか。

「……………」

「別に他意はないぞ」

私の疑いの眼差しを受け、アサトさんはそんな弁解をする。やはり、疑わしい。彼も常にポーカーフェイスなので、表情からは本心が読み取れないが。

「判りました。では、この件とはまったく関係なく——ゲームをしませんか？」

「ゲーム？ なになにー？」

ゲームという単語に反応し、ベアトリーチェが割って入ってくる。さりげなくアサトさんの腕に自分の腕を絡めている。姉さんは気にしていない風を装っているが、落ち着かない様子で、それをちらちらと見ている。ハーレム主人人気取りは死ねばいい。

「この個別包装されたクッキーにはジャムが入っています。しかし、一つだけ辛子が入っているものがあります。それを引いた人の負けです」

「ふむ、ロシアン・ルーレットか」



タオエンは魔女（了）

私の説明を聞き、姉さんがベアトリーチェをアサトさんから引きはがしながら言う。

「ルールは判った。で、勝ったらどうなるんだ？」

「のたうち回る敗者を蔑む権利が与えられます」

「……お前は悪魔か」

「今は魔女ですがなにか？」

当然の受け答えをすると、アサトさんは口をつぐんだ。その表情を見て多少は溜飲りゅういんが下がったので、結局、ゲームはやらなかった。「やっぱり魔女だな」という負け犬の遠吠えが聞こえた気がしたが、しよせんは敗者の戯言たわごとだ。聞き流してあげよう。

まったく、こんな慈悲深い魔女がいるはずがない。

——そうでしょうか？

## あとがき

どうも、流遠亜沙です。

ソイエス  
Z S 〈ツイドチック・ストラテジー〉『タオエンは魔女』をお届け致します。

前作のタイトルが『プライベート・ライアン』のパロディだったので、今回は『奥さまは魔女』です。例によって観た事はありません。

ハロウィン用にイラストを描いたので、せっかくだからと文章も付けてみました。

やはりタオエンは魔女だと思いますが、どうでしょう？

ちなみにこの話、何の構想もない状態から三時間ほど書きました。なので、ブログの雑談とほぼ変わりません。シチュエーションが決まっていれば、手を動かせば何か出来る——そんな一例です。

今回は特に書くべき事が他に思いつかないので、早いですが謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。タオエンは生まれてからまだ半年ほどのキャラですが、いかがでしょう？ もう定着しているでしょうか？ 百合で毒舌という癖の強い娘<sup>こ</sup>ですが、愛してもらえると嬉しいです。それでは、また次の作品でお会い出来ればと思います。

——いたずらしたい派ですか？ されたい派ですか？

2014 / 10 / 30 流遠亜沙

アンケートに答える

『Z S 〈ツイドチック・ストラテジー〉』ページに戻る